

9 months after KUWEXIT

住友商事(株) 国内環境エネルギー事業部 夏目 友美

1. はじめに

3年間のクウェート生活を終え日本に帰国してから既に9ヵ月が経った。砂嵐が原因の体調不良にも悩まされなくなり、スギ花粉にも負けず麗かな日本の春を謳歌している。駐在前にクウェート市場を担当していた期間も合わせると合計5年、会社に入った当初はまさか自分が中東の国に駐在することがあろうとは、微塵も想像していなかった。今回寄稿を依頼頂いた理由とも重なるのだが、日本の企業が中東に女性駐在員を出すケースはまだまだ少なく、男性の行く所というイメージがあったからかもしれない。3年間のクウェート生活で体験したことをご紹介することで、中東地域及びクウェートについて身近に感じて頂けたらと思う。

前置きが長くなったが、2015年3月から当社が出資参画するアズール・ノース発電・造水事業の事業会社に出向していた。2013年末からプラント建設工事を開始、2016年11月に完工し、1,500MWの電気と48万トン/日の水をクウェートの皆さんにお届けしている。



クウェートのシンボルといえば



アズール・ノース発電造水プラント



筆者

本件は同国初の PPP (Public-Private-Partnership) 案件であり、その道のりは決して平坦なものではなかったが、一担当者としては常にエキサイティングで飽きることのない、そしてクウェートという日本人にはあまり馴染みのない国にどっぷりと浸かることのできた貴重な機会だった。

2. クウェートでの暮らし

言わずもがな、クウェートの国教はイスラム教である。イスラム教と聞くと、お隣サウジアラビアでは最近になってやっと女性の運転免許証取得が解禁されたというニュースなど、女性が差別的に扱われ、抑圧されているというイメージを持つ方も多いだろう。また、男女間の接触が制限されている、というのも事実である。これらの社会的背景を理由に、クウェートを始めとする中東諸国では、外国人女性が駐在員として働くのは難しそう、というイメージが根強いのだろう。では、実際に女性が差別の対象とされているかということ、イスラム教の聖典コーランでは、男性は女性の保護者とされており、大切に保護するが故に上記のような制度や文化が存在する様だ。

では、実際の生活はどのようなのか。(以下はあくまでクウェートのケースである。)

【政治とビジネス】

女性に参政権が与えられたのは2005年、最初の選挙では女性国会議員誕生とはならなかったが、2016年に行われた選挙では、50議席中1議席を女性議員が獲得した。省庁や企業のトップの殆どが男性だが、これは年代も理由のようで、シニアマネージャーレベルまで行くと日本と比べてもかなり女性の割合が多かった印象だ。また、彼女達は女性の社会進出第一世代だからなのか、パワフルで優秀な方が多く、仕事の場面でも大いに助けて頂いた。

女性の進出が進んでいるとはいえ、筆者の様なアジア人女性がビジネスの場に出てくることはまだ珍しく、自分だけ会議室に入ることを止められたり、最初は中々目を合わせて話を聞いてもらえなかったり、という経験も少なからずあった。これはあくまで慣れの問題と考えることにして、時間をかけて面談の回数と会話を重ね、一人の仕事相手として認識してもらい、信頼関係を構築す



国会の建物はさすがに豪華

ることが重要だった。

【海外旅行】

それぞれの家庭の方針にもよるが、海外旅行には保護者である男性が同行しなければならず、出張に関しても同様である。一度クウェート人女性の同僚と海外出張に行った際には、彼女のお兄さんが飛行機代も現地のホテル代も自費で同行したのには驚いた。妹の出張に乗じて海外旅行を楽しむのかと思ったが、妹が仕事をしている間はホテルで寝ていたとのことで、本当に引率の為だけに来ているようだった。上司として出張命令を出す際にも、その場で即決を求めず、父親の了承を取得する必要がある可能性を念頭に置き、男性親族の同行が必要な場合はスケジュール上問題ないかを確認するなど、それぞれの社員の事情に合わせて計画を立てる必要があった。

【結婚式】

結婚式は男女別に行われる。神式やキリスト教式の結婚式の様な宗教的儀式という要素はなく、お披露目パーティーという趣旨だ。大抵の場合は同日に別会場・同時進行で行われ、最後に新郎が新婦側の会場に現れて、女性たちの歓声の中新婦と共に退場してお開き、というのが基本の流れだ。一度だけ同僚の結婚パーティーに出席したことは、クウェート生活で最も記憶に残る思い出の一つになった。

会場の入り口にはアバヤを着た女性が次々と吸い込まれていく。一歩中に入った途端、彼女たちはアバヤを脱ぎ、普段見ることのない露出度高めのパーティードレス姿へと変身する。会場の入り口で携帯電話を没収されたのは、彼女たちの姿を写真に収めないようにするためなのだろう。列席者はもちろん、スタッフも全員女性である。その場にいる唯一の男性は、会場の音楽とアナウンスを担当する DJ だが、彼も会場内の様子を見ることはできず、隔離された窓のない部屋で会場スタッフからの無線を頼りに司会進行をするらしい。明確な式次第はなく、開始時間も大体20時、日本人らしく時間通りに行ってみたが、主役である新婦が登場したのは22時直前だった。ここでもクウェートタイムは健在だな、と妙に納得。その後日付が変わる頃まで粘ってみたものの結局新郎は現れず、後日聞いたところによると深夜1時になってようやく登場したそうだ。(もちろんその際には列席者は皆アバヤを再着用して新郎を待つ。)

【映画館】

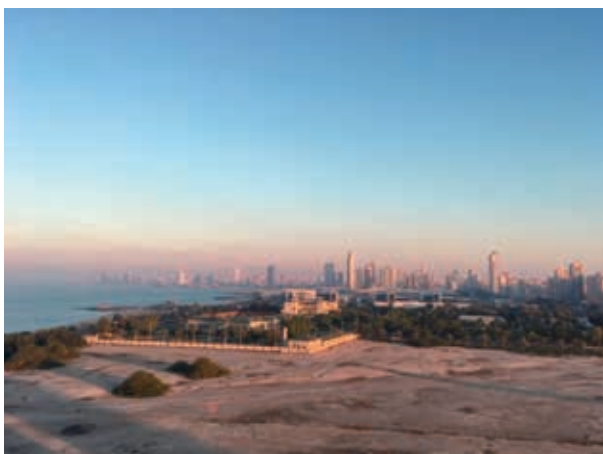
クウェートで日常生活を送っていても、男女で分かれている場所はほとんど見かけない。大学の図書館の自習スペースが女子学生専用席とミックス席の二つに分けられているのを見たくらいだ。もう一カ所、男女で分かれている場所が映画館である。大抵の映画館は、

前方座席がバチエラーシートと呼ばれ、男性だけのグループ用、後方座席はファミリーシートと言って、グループに最低一人女性がいなければ座ることができない。娯楽の少ないクウェートでは、映画は週末の重要なオプションの一つである。職場には筆者のように自国に家族を置いて単身でクウェートに働きに来ている同僚も多かったが、彼らだけではバチエラーシートに座るしかなく、女性をグループに入れることでスクリーンがより見やすいファミリーシートに座りたいがために、同僚から映画に誘われることも多かった。快適な席に座るためだけのダシに使われているのは分かりつつも、お酒が手に入らず飲みニケーションが使えない中、コーラ片手に映画の感想を言い合いながら過ごす週末は、同僚との親交を深める良い機会になった。

クウェートで生活する中で発見した男女の違いを挙げてみたが、実際に生活していて不便に思うことは殆ど無かった。仕事相手と信頼関係を構築するという意味では、先にも書いた通り、男性に比べると少し余計に時間がかかってしまうこともあるが、だからと言って仕事にならない訳ではない。特にアジア人女性の珍しさから、どこに行ってもすぐ顔を覚えてもらえた為、5年間足繁く通いながらも最後までマスターすることのできなかった電力水省の巨大な迷路のような建物でも、道に迷っていると誰かに声を掛けられて会議室に連れて行ってもらえるなど、むしろ得をすることも多かった。

3. おわりに

お酒と豚肉が手に入らない、娯楽が少ない、夏は暑い、冬は寒い、砂嵐の後は家の中まで砂だらけになる、空港に行くたびに対応の悪さに血圧が上がる…不満を言い出だすと何時間あっても足りないクウェート生活ではあったが、いざ日本に帰ってみると、毎日近所のモスクから流れていたアザーンさえも恋しくなってしまう。そんなクウェート生活の一端をご紹介させて頂いたが、少しでも読者の皆さんにクウェートと中東地域を身近に感じて頂ければ幸いである。



砂嵐前



砂嵐中